

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・0915 NO31

校長 伊波喜一

難病の 改善不能 過去の事 医療の現場 日進月歩ぞ

「ヒトのiPS細胞から作った神経細胞をパーキンソン病のサル
の脳に移植すると、症状が軽減することを京都大iPS細胞研究所
が確認した」との記事が載りました(8月31日付朝日新聞朝刊)。
ヒトのiPS細胞からドーパミンを作る神経細胞を作り、パーキン
ソン病のカニクイザルの脳に移植したところ、震えが減り、動ける
時間が増えるなど全体的に症状が改善しました。iPS細胞による
再生医療をめぐるのは目の難病「加齢黄斑変性」への網膜組織の移
植が先行しています。ただしヒトへの安全性や有効性に関しては、
ともにデータ蓄積を丹念に取っていくことが必要であるのは、論を
待ちません。再生医療は長足の進歩を遂げています。難病治療に
活路が開かれることで、閉ざされていた道が開け、一人一人の可能
性が拓かれてゆくのは、素晴らしいことです。とともに、医学の倫
理面からも十分に検討する必要があります。治療に伴う患者の自力
更生という目標が見失われ、研究そのものが目的になったのでは、
それこそ本末転倒です。目を光らせてゆかねばと、思っています。